文章を読む際の内なる声

○西村 聡生
(安田女子大学)

Inner reading voices
Akio Nishimura
(Yasuda Women's University)

問題と目的

文章を読む際には、黙読、音読、速読などさまざまな読み方があり、また音韻化の程度もさまざまに異なる。Vilhauer (2016) は、文章を読む際に意識せずとも頭の中で音声化されて聞こえる声（以下、内なる声、とする）について、質問回答サイトであるYahoo! Answersに寄せられた投稿を分析することで報告した。読書中に内なる声が聞こえる人の割合は82.5%にも上ったが、これはwebサイトへの投稿の分析であるため、聞こえる人に書き込みが集中し、実際よりも割合が過大評価されている可能性がある。そこで本研究では、質問紙を用いて日本人女子大学生における、文章を読む際の内なる声について検討した。またその結果に基づき、どのような場合に内なる声が聞こえやすいか実験的に検討した。

質問紙調査

方法 女子大学生71名（うち有効回答69名）が質問紙に回答した。質問紙は、文章を読む際に文字が「音声」として聞こえることがあるか（頭の中で声を出さずに音読している場合は除くことを注記）、聞こえる場合には聞こえる文章（小説、論文、雑誌、新聞、エッセイ、説明書、LINE、Twitter、手紙、日記、詩、俳句、その他（自由記述；以下同様）から複数選択可）、誰の声か、どんな声か、必ず聞こえるか、必ず聞こえるわけではないならどのような場合に聞こえどのような場合に聞こえないか、などから構成された。結果 内なる声が聞こえると回答したのは37名（54%）、聞こえないと回答したのは32名（46%）であった。聞こえると回答したうち、常に聞こえる人が55%、場合により聞こえる人が45%であった。聞こえるのは、集中している、感情移入している、好感度が高い、イメージできるなど、一般に文章や読むことに対してポジティブな場合が多く、聞こえないのは、機械的に読んでいる、面倒、興味関心が低いなどネガティブな場合が多かった。また声が聞こえる文章は、小説がもつとも多かった。声の人物や特徴については、幅広い回答が得られた。

考察 文章を読むときに内なる声が聞こえるのは半数程度であり、Vilhauer (2016) によるweb上の投稿の分析よりもずいぶん少なかったことから、後者では書き込んでいたのは内なる声が聞こえる人物が多く、内なる声が聞こえる割合が過大評価されていたことが示唆される。しかし、文化、言語、年齢、性別などさまざまな点においても両研究の分析対象者は異なっており、そういった要因が内なる声の聞こえやすさに影響を及ぼすかについては今後の検討課題である。また、聞こえると回答した人の中でも、半数程度は常に内なる声が聞こえるわけではなく、聞こえる場合もあれば聞こえない場合もあると報告し、個人間のみならず個人内でも内なる声の発生に違いがみられることが示された。

実験

質問紙調査における内なる声が聞こえやすい場合の回答のうちイメージのしやすさに着目し、場面のイメージしやすさにつながると考えられる挿絵と、人物のイメージしやすさにつながると考えられる会話文が、内なる声の聞こえやすさに及ぼす影響について実験的に検討した。

方法 文章を読む際に内なる声が聞こえることがある女子大学生75名（うち分析対象71名）が、実験に参加した。参加者は、文章を黙読し、質問紙に回答することを4回繰り返した。文章は『不思議の国のアリス』から、会話文がある2場面とない2場面の4場面を、平均447文字で用意した。すべての場面について挿絵がある場合とない場合を用意した。会話文の有無と挿絵の有無の組合せによる4場面の文章を読む順番は、カウンターバランスをとった。質問紙は、内容理解テストおよび内なる声が聞こえたかなどの質問項目から構成された。

結果 文章を読んでいるときに内なる声が聞こえたのは、挿絵がある場合は2回中平均1.78回、ない場合は1.78回であり、挿絵の有無による内なる声の聞こえやすさの違いはみられなかった。一方、会話文がある場合は2回中平均1.93回、ない場合は1.62回であり、会話文がある文章の方がない文章よりも読んでいるときに内なる声が聞こえやすかった ($t(70) = 3.49, p < .001, d = .534$)。

考察 会話文によって内なる声の出現率は上昇したが、挿絵による影響はみられなかった。会話文はそれ自体が場面での発声や言語使用を表しているため、内なる声の出現につながったのかもしれない。また、今回使用した文章は有名な児童小説であり、参加者にとってなじみがあり、場面想像も難しくなかったと考えられる。場面想像が比較的難しい文章では挿絵が内なる声の出現率に影響する可能性は残されている。

結論

本研究において、文章を読む際にその文章が自動的に頭の中で声として聞こえることがある人の割合は半分程度だった。内なる声が誰の声かや声の特徴には大きな個人差がみられたが、どのような場合に聞こえやすいかについては、一定の傾向がみられた。質問紙の回答から文章や読むことにポジティブな場合に、また実験結果から文章中に会話文がある場合に、内なる声が聞こえやすくなることが示された。

引用文献

Vilhauer, R. P. (2016). Inner reading voices: An overlooked form of inner speech. *Psychosis*, 8, 37-47.

※本研究の一部は、著者の指導による本光優香さん（安田女子大学）の2017年度卒業論文に基づく。